

精神科病院における女性患者の意識調査から示唆を得た男性看護師の関わり

キーワード：男性看護師 女性患者 意識調査

○大津武之¹⁾、前川賢哉¹⁾、瀧澤いずみ¹⁾
新潟信愛病院¹⁾

I 目的

先行研究では、同性看護師からのケアは男性・女性ともに肯定的に捉えられ、異性看護師からのケアは、男性患者は精神的配慮、女性患者は身体的ケアに配慮する必要性が認められており、一般病院では患者は異性看護師からのケアを拒否することが多いと報告されている。看護師 20 名うち男性看護師 4 名が勤務している精神科の女性急性期病棟でも、男性看護師からのケアを拒否する場面がある。今回、入院患者の意識調査から男性看護師の今後の関わりの示唆を得ることを目的とした。

II 方法

1. 研究期間

2013 年 8 月 1 日～2013 年 9 月 30 日

2. 研究対象

主治医の許可と本研究への参加に同意を得られた精神科女性急性期病棟入院全患者で質問用紙に答えられる方。

3. 実践内容

性差比較が抽出しやすい独自の自記式質問紙調査を使用、一部聞き取り調査を実施した。質問内容は、1)対話：①男性看護師との会話②存在。2)入浴：③入浴誘導④衣類準備。3)治療：⑤軟膏処置、湿布貼付⑥臀部への筋肉注射、採血、点滴。4)排泄：⑦排泄介助⑧便尿回数確認⑨下着やオムツの着脱の 4 場面 9 項目に分けた。評価は、1.非常に抵抗ある 2.抵抗ある 3.少し抵抗ある 4.あまり抵抗ない 5.抵抗ない 6.わからないの 6 段階選択方式とした。その他、抵抗がある場合の対応として、女性看護師にかわってもらい、拒否する、抵抗があるが言わない、わからない、の選択項目を設けた。また、自由記載欄を設け患者が日常感じていることを記載してもらった。

III 倫理的配慮

対象者、家族への研究の趣旨、参加は自由であること、不利益を被らないこと、及びプライバシーの保護について文書を用いて説明し同意を得た。

IV 結果

アンケート回収率 82% (n=38)。回答結果は、対話「抵抗がない」61%。男性看護師の存在「抵抗がない」68%。入浴誘導「抵抗がある」79%。衣類準備「抵抗がある」61%。軟膏処置、湿布貼付「抵抗がある」54%。臀部への筋肉注射、採血、点滴「抵抗がある」55%。排泄介助「抵抗がある」55%。便尿回数確認

「抵抗がない」68%。下着やオムツの着脱「抵抗がある」68%。抵抗がある場合、女性看護師に変わってもらい、拒否する 61%。抵抗感はあるが言えない 39%。自由記載では、「騒ぐ人がいた時、頼りになる」「考え方が大きくアドバイスを貰えたことが嬉しかった」「困った時、優しく勇気づけてもらった」と肯定的記載があった。

V 考察

入浴、治療、排泄など身体的接触を伴う看護ケアの場面では羞恥感情を抱き、抵抗を感じる回答が多かった。船橋は「身体的接触は性的な接触を連想させがちなので、異性愛が支配的な現代では、異性の看護者から身体的接触を伴う処置を受けるとき、同性の看護者から受けるよりも一層強く、羞恥感情が呼び起されやすい¹⁾」と述べている。男性看護師の看護ケアでは、女性看護師に変わってもらい、拒否する意見があり、一方で抵抗感はあるが言えない意見もあるため、男性看護師は女性看護師と連携し、求められる看護ケアに努めることが大切である。

男性看護師と対話をするには抵抗なく頼りになる、考え方が大きくアドバイスを貰えたことが嬉しかったなど、肯定的な記載があった。山崎は「医療消費者の多くは画一化されたジェンダーの規範やイメージによってではなく、個人の専門的能力(知識・技能)や人間的態度によって医療者を評価するようになるのではないかと述べている。関わりを積み重ねていくうちに女性患者は会話、相談相手として、男性看護師の存在を肯定的に受け止めていたと考える。

VI 結論

1. 女性患者は身体的接触や羞恥感情を伴う看護ケアの場面では男性看護師に対して抵抗を感じていたため、男性看護師は女性看護師と連携することが大切である。
2. 女性患者は会話、相談相手として、男性看護師の存在を肯定的に受け止めていたため、男性看護師は信頼されているという自覚をもって関わるのが大切である。

引用文献

- 1) 船橋恵子. 看護とジェンダー. 看護教育. 2001 ; 42(1) : 14-18.
- 2) 山崎裕二. 男性看護師の感情の歴史点描—看護師社会におけるジェンダーの行方. 看護学雑誌. 2002 ; 66(11) : 1012-1017.